

## 青へ翔ぶ

高島清子

郭公や鶯や名も知らぬ鳥の声が満ちている朝  
私は窓の奥に逃げてジャマイカのコーヒーを淹れ  
ひと時の安らぎを飲みながら  
危険な隣人となったコロナのことを思った

テレビにはIG240だという

台湾のオードリー・タンの大顔が映り

私は心は女性なのよと言っている

救世主となった今はそのどちらでも差し支えは無いだろう  
あの時いち早く世界中のマスクを買い集め国民を救った  
超天才の次の言葉を待ちながらテレビは消せない

私は香しいカフェインのせいで詩的脳になる

地球が首に巻いている青い紗のスカーフは

バンアレン帯でありそのまた奥は漆黒の宇宙で

正体不明の暗黒物質だと知ったのだが

そこままで夢は終りなのだ

私の夢の先のそのまた遠くで

静かにサイコロを振っている者がいる

ひとまず神とすればイメージしやすいので神とすると

台湾の天才も釈迦もキリストも私たちも

神の手が振るサイコロの目で

この世界は神の遊びの庭であると思えば

なんだか嬉しくはないか

君の運命も私の今日も設計図の点に過ぎないとすれば

北半球に六月の匂いが満ちているのに  
この頃は人たちの心の枠が少しづれて  
無いものをかき集めて無理やり（幸福）と言ったり  
当たり前のことにやたら（ありがとう）と言うのには  
うんざりである

今朝私の窓を掠めて飛び去った一羽の鳥が  
澄んだ声で歌いながら  
碧の中へと落ちて行くのを見た